



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2000.10 創刊号



ご・あ・い・さ・つ

より親しまれる会報づくりに、皆様のご協力を

日本SPF豚協会 会長 赤池 洋二

日本SPF豚協会は発足以来、今年で33年目を迎えました。SPF養豚は従来にはなかった新技術をとまなうものであり、草創期にはまさに試行錯誤の連続でした。一般には、SPF豚を無菌豚のイメージでとらえ、SPF養豚がさも非現実的であるかのような論議がはびこり、これがSPF養豚の発展に大きな足かせになったことは否めません。

しかしながら、会員各位は当初から卓越した先見性をもってこの問題に取り組み、SPF養豚の基礎固めに努力してこられました。その結果、今日では、無菌豚のイメージはほぼ払拭され、SPF養豚は革新的な技術を駆使して健康な豚を育てるための極めて有効な手段であると理解されるようになってきました。

現在、当協会の会員数は正会員152名、特別会員1名、賛助会員4名であり、認定農場数は151農場になっております。また、認定農場で飼育される繁殖雌豚数は約5万5,000頭、そこで生産される肉豚は約122万頭であり、国内生産量のほぼ7.3%と推定されますが、その差別化販売は一部地域を除いてあまり進んでいません。

今後、このSPF養豚をさらに発展させるためには、会員相互の情報交換や技術の統一と革新を進めるとともに、協会の基盤強化と活性化が必須条件となります。

これらの問題に取り組む一環として、このたび会報を発刊することになりました。発行は年4回(4月、7月、10月、1月)とし、記事の内容は、認定情報をはじめ、技術情報、時の話題、会員の紹介、協会の活動方針や連絡事項等を取りあげていくことにしました。また今後は、会員や消費者からの投書欄、各生産ピラミッドの活動状況の紹介欄などを設けることも視野にいられていきたいと思っております。

しかしながら、この会報が会員に親しまれ、永続していくためには、誌面の充実はもとより、会員各位の絶大な支持と協力がなくては不可能です。常勤職員もいない事務局でこの仕事をこなしていくためには、相当な努力が必要と思われれます。会員各位におかれましては、このことに充分ご理解いただき、誌面づくりへの積極的なご参加とご支援をいただきますよう心から期待しております。

SPF 養豚の はじまり

①

米国ネブラスカ州立大学のG.A.ヤング教授は、野外調査によって、SEP(マイコプラズマ肺炎)とAR(萎縮性鼻炎)に汚染されている農場の豚は発育が1ヶ月近く遅れることを知り、その対策としてSPF養豚システムを考案した(1952)。その際、前提となったのが、正常な豚の子宮内は無菌であることと、その子豚を分娩直前に外科的に取り出し、母豚の初乳を与えずに育て、これを自然繁殖によって増殖しながら一般の豚と隔離して飼育する技術の開発であった。これら一連の考え方や技術が、1962年(昭37)信藤謙蔵博士によって紹介され、わが国におけるSPF豚開発の契機となった。(以下次号)

発刊によせて

日本SPF豚協会認定委員会委員長
北海道大学名誉教授

波岡 茂郎



この度SPF協会から季刊誌が発行されることとなり、心からお喜び申し上げます。

翻って約40年前の昭和35年頃、わが国は戦後の混乱を経て、ようやく経済復興が加速し始め、それに伴って所得倍増の機運にありました。これに平行して動物タンパクの摂取量も増えつづけ、それを支えたのが豚、鶏肉で、とくに豚の飼育頭数は年々倍増しました。ちなみに、敗戦直後の昭和21年にはわが国の養豚総数は約8万頭と激減しましたが、昭和35年以降急増し、昭和40年には常時頭数800万頭と敗戦直後の100倍に達しました。

ここでわが国の養豚界に一種の革命が起こり、従来のヨーク、パークに代わって、産子数、産肉性、飼料要求率がはるかに勝る欧米の大型種の導入がなされました。一方、飼養法も多頭化、専門化が進められてきました。

しかし、ここで新たないくつかの重大な問題に遭遇しました。すなわち、過去にわが国には皆無であった疾病の蔓延をみたのです。SEP、萎縮性鼻炎、豚赤痢など

がそれで、当時は診断法や治療・予防法が確立しておらず、せっかく大型種の導入によって生産性を向上させようとした意図が裏目に出て、結果として膨大な抗生物質の使用や餌のムダ食いが経営を圧迫しました。

このような養豚界の深刻な悩みを解決しようとして始められたのがSPF豚による集団変換計画でした。昭和40年頃の話です。当該計画のねらいは特定疾病の排除によって、本来有している大型品種の能力を最大限に発揮させようというものでした。これによって薬品費や餌のムダ食いから来る損失を抑え、生産性を向上させることができました。

とはいえ、この計画は当時官民双方の理解を得ることがむずかしく、SPF化に取り組んできた人々の苦労は大変なものがありました。しかし、今やわが国を取りまく環境は当時からみていちじるしく変化し、にわかにはSPF豚が消費者の側からも評価されるに至りました。この機を逃さずSPF豚をわが国に定着させ、かつSPF豚協会を発展させた、私どもより若い世代の方々のご努力には心から敬服せざるを得ません。

また、この機会に協会の季刊誌を発行し、これによってSPF豚産業の発展を意図され、正しい普及に努めようとされている方々のますますの発展を心から祈願いたします。

●協会からのお知らせ●

●SPF豚研究会の開催(日本SPF豚研究会主催)

SPF豚研究会が下記のとおり開催されます。

期日 平成12年11月15日(水)
研究会：午後1時～5時
懇親会：午後5時30分より
場所 研究会：東京大学弥生講堂
懇親会：東京大学山上会館
会費 会員：無料、非会員：2,000円
懇親会：5,000円

<プログラム>

1. 開会のあいさつ
山本孝史会長 13:00～13:05
2. 研究会総会 13:05～13:20
3. 講演
1) サルモネラについて

山本孝史会長 13:20～14:10

2) 日本SPF豚協会年次報告

日本SPF豚協会事務局 14:10～14:40

休憩 14:40～15:00

3) 衛生検査の立場からみた最近の疾病動向

矢原芳博先生 15:00～15:30

4) 農場紹介 (有)クリーンポーク豊丘

松下敏文先生 16:00～16:30

(注) この研究会は日本SPF豚研究会(山本 孝史会長)が主催するもので、日本SPF豚協会が主催するセミナーではありません。非会員の方は研究会々場の受付で入会手続きをすることができます。なお、個人会員の年会費は2,000円です。研究会開催時の入場料は2,000円ですが、会員は無料です。また、会員には機関誌『ALL about SWINE』が年2回届けられます。

● SPF養豚セミナーの開催(日本SPF豚協会主催)

以前は東京でセミナーを開催しておりましたが、遠隔地の会員や従業員の方々は出席したくてもできないことも多かったのではないかと思います。そこで、今年度から西日本地区と北日本地区でセミナーを開催することを計画しております。とりあえず、今年度は2月頃南九州で開催します(詳細は別途ご案内します)が、来年度からは夏(北日本)、冬(西日本)の2回開催する予定です。もちろん会員、非会員を問わず、どこかのセミナーに参加することも自由です。参加費は原則として無料としますが、懇親会は実費をいただくことになります。

なお、関東地区では、研究会との重複をさける意味もあって今のところ開催の予定はありません。関東地区およびその周辺の会員の方々は、日本SPF豚研究会に入会の上、上記研究会に参加されることをおすすめします。

● 協会役員

[総代]

<北海道・東北>日浅 文男(道南アグロ、北海道)、山中茂樹(山中畜産、北海道)、小田島 健夫(ケイアイファーム、岩手県) 村山 悠(ユキザワ、秋田県)

<関東・中部・甲・信・越>清水 貢(清水養豚、千葉県)、倉持 信之(山西牧場、茨城県)、佐々木 作三(佐々木農場、千葉県)、松田字一郎(マルス農場、静岡県)、待井 豊(長野県農協直販、長野県) <近畿・中四国・九州>越智奉身(愛媛ハイピュア、愛媛県)、森川 力(九州ノーサンファーム、鹿児島県)、守山 実夫(守山畜産、宮崎県)

[理事]

赤池 洋二(会長、横浜市)、横山 春樹(副会長、JA全農)、高橋 吉男(副会長、シムコ)、海老 成直(事務局長、横浜市)、伊藤 寿志(ホクレン)、石川 輝芳(志波姫養豚組合)、林 哲(伊藤忠飼料)、畦蒜 利昌(千葉県経済連)、林 寛康(林商店)、吉田 洋二(日本ハイポー)、秦 政弘(サンエスブリーディング)、原 勇介(日本農産工業)

[SPF豚農場認定委員]

波岡 茂郎(委員長、北大名誉教授)、柏崎 守(副委員長、農林漁業金融公庫技術参与)、三上 仁志(農林漁業金融公庫技術参与・養豚学会副会長)、小磯 孝(種豚登録協会)、赤池 洋二(日本SPF豚協会々長)、横山 春樹(日本SPF豚協会副会長)、高橋 吉男(日本SPF豚協会副会長)、高谷 和宏(ホクレン)、堀河 博(伊藤忠飼料)、畦蒜 利昌(千葉県経済連)、立石 雅男(日本ハイポー)、原 勇介(日本農産工業)、佐野 公春(清水港飼料)、阿部 宇一郎(シムコ)、花岡 秀昌(JA全農)

● 総代選挙について

平成13年は総代改選の年となります。詳細は追って通知しますので、ご協力をお願いします。

● 協会パンフレット・ビデオのご案内

協会のパンフレットが今年の春、完成いたしました。会員の皆様には5部ずつの配布となっています。お手元にはない方は所属ピラミッドまでお問い合わせください。なお、それ以外に実費にて販売もしております。また、協会作成のPRビデオ「安心と美味しさ求めて」も販売しておりますので、ご希望の方は事務局までご連絡下さい。

● 認定情報 ●

● 平成12年度認定農場

[3月認定](有効期間:平成12年3月17日から13年3月末日まで)

北海道・富良野スワインファーム(有)、宮城県・住商飼料畜産(株)丸森農場、秋田県・(有)十和田湖高原ファーム

千葉県・(有)シムコ館山事業所、石上養豚場、鈴木養豚場、石毛養豚場、飯田(美)養豚場、平野養豚場、飯田(文)養豚場、静岡県・富士畜産(有)室田農場、長野県・(農)エスピーエフこがねや第二農場、島根県・(有)奥出雲ファーム 山口県・日本ハイポー(株)山口農場、愛媛県・松田養豚、愛媛くみあい畜産(株)天貢農場、(有)川上牧場、熊本県・全農SPFAIセンター、JA熊本経済連大津原種豚センター、新古閑養豚農事法人、(有)ピッグファーム陳、天草梅肉ポーク(株)、(有)やまとんファーム、(有)七城SPFファーム、鹿児島県・日本フィード(株)GP農場、ニッポンフィード(株)竹山農場、(株)長島ファームSPF農場(27農場)

[6月認定](有効期間:平成12年6月11日から13年6月末日まで)

青森県・(株)カワケンSPF第三農場、福島県・(株)フリーデン都路牧場、新潟県・外川畜産興業、栃木県・(株)ノイバーン、茨城県・弓野養豚場、(農)新利根養豚組合、(有)奥田農場、小泉養豚場、埼玉県・(有)ナスクリーンポーク、群馬県・(有)タカハシファーム碓氷高原農場、千葉県・(有)藤崎農場、(有)下山農場、岡野養豚場、高橋保養豚、吉田養豚場、山本養豚場、向後養豚場、宮沢養豚場、江波戸養豚場、石毛宏司養豚、(株)林商店塚本農場、兵庫県・(農)八鹿畜産、鳥取県・東伯町農業協同組合上馬場農場、同矢下農場、西日本ジェイエイ畜産(株)名和農場、愛媛県・清昇養豚、山口養豚、富永養豚、第一養豚、旭養豚、長崎県・長崎県経済連 五島種豚供給センター、浜田養豚、伊藤ファーム、熊本県・(有)ニッポンフィード牧場 平田農場、宮崎県・日本スワイン(有)鶴戸農場、(有)レクスト、

鹿児島県・(有)ザボンファーム第二農場、同第三農場、(株)開協ファームSPF子豚生産農場、同牛鼻肥育センター

(40農場)

[9月認定](有効期間:平成12年9月13日から13年9月末日まで)
北海道・ホクレン滝川スワインステーション、(有)山中畜産、ササキSPFファーム、寒河江農場、浅野農場、青森県・カワケンSPFファーム、岩手県・全農東日本原種豚農場、岩手経済連種豚センター矢巾分場、(有)ケイアイファーム北上農場、秋田県・秋田経済連SPF種豚場、(資)深沢スワインファーム、宮城県・(株)シムコ岩出山事業所、福島県・(株)ナミエ、栃木県・サンエス大渡農場、(有)K&Tコーポレーション、茨城県・小沼養豚場、常陽醗酵農法牧場(株)、東京養豚農業協同

組合岩井牧場、千葉県・(有)東海ファーム、群馬県・(有)小黒養豚、岸養豚場、(有)ほそや、畑中畜産、静岡県・(株)マルス農場、長野県・(有)岩垂原エスピーエフ農場、SPF創成自農舎タローファーム、(農)エスピーエフこがねや第一農場、JA長野経済連SPF種豚センター、クリーンポーク豊丘、香川県・(株)七星食品多和ファーム、愛媛県・県農えひめ広見種豚増殖センター、同野村種豚増殖センター、長崎県・第三セクター職業訓練法人長崎能力開発センター、熊本県・(有)ニッポンフィード牧場木庭農場、同高本農場、宮城県・(株)九州ノーサンファームえびの種豚場、(農)守山畜産、(有)ニッポンフィード牧場西田牧場、鹿児島県・(株)シムコ鶴田事業所、(株)九州ノーサンファーム大口農場、長野養豚 (41農場)

認定委員会の窓から

日本SPF豚協会認定委員会委員長 波岡 茂郎
北海道大学名誉教授

かつて、水産学の分野では大洋の回遊魚をいかに効率的に捕獲するかの技術の開発に余念がなかった。しかし海洋資源の保護や、領海水域の漁業の規制が高まるにつれ、養殖漁業の比率が上昇してきた。現在の世界の総漁獲量は1億3000万トンであるが、養殖魚のそれはすでに2000万トンの多きに達し、この辺が養魚量の限界だろうとされている。一方、養殖魚が洋上捕獲と大きく異なるのは、それが生け簀で密飼いされ、常に感染症の脅威にさらされていることである。このことと豚や鶏の多頭羽飼育の状況とはきわめて類似しており、養殖魚の場合もいかに疾病をコントロールするかが最大の懸案事項となっている。そのひとつとして種々のワクチンの開発があげられており、要するに限りなくSPF状態に近づける努力がなされている。たとえばノルウェーでは3つの生け簀を輪番で使用し、常にひとつは空けておく。ワクチンの強化、健康診断の義務化、品質保証システム、秩序ある生産出荷体制などが実行されている。さらに抗生物質の使用をなるべく減らし、有効なワクチンによる感染症の予防に努めている。このような養殖魚の生産方法はSPF豚飼育に種々の示唆を与えてくれるため、私どもも現在行われている養殖魚の技術に大きな関心を持たざるを得ない。

ところで、米国の養豚界ではしばしば「beginner's profit」という言葉を使う。「新参者の大儲け」とでも言

えよう。新しく豚舎を建て、GP農場からSPF豚母豚を導入し、マニュアルどおりにまじめに飼育すると想像以上の成績があがる。たまたま出荷時期が豚価の高い時に巡り会うと大儲けする。そこで少しぐらい手を抜いてもと思うのが人情である一方、このことが以後の成績を大きく左右することになる。

毎年SPF豚の認定農場の査定を行っている、同じピラミッドのGP農場由来PS豚を飼育していても個々のコマmercial農場でその成績がかなり異なる。また年余にわたって同一の好成績をあげている農場がある一方、年を追って成績が下降するところもある。これらの状況を種々の面から検討すると、それを裏付けるデータが浮かび上がってくる。各ピラミッドの責任者や認定作業にあたる獣医師はこのことに対して苦慮し、なんとか認定にこぎつけたいと四苦八苦する。ここで各SPF豚飼育者が自分たちの成績がどのようなレベルにあるのかを協会が毎年公表する「CM認定農場生産成績のまとめ」等で再確認することを強くすすめたい。そうすることによって己が欠陥をいかに是正すべきかが明らかになる。わが国社会の改革があらゆる分野で叫ばれている昨今であるが、養豚におけるSPF化はまさに時代を先取りする画期的な技術革新であったはずである。水産界では洋上捕獲から養殖魚への転換のなかで、限りなくSPF化に近づけたいと努力している反面、すでにSPF化の技術が導入されている養豚界で、あるべき成績が持続できなくなると、SPF養豚家一人一人の真剣な反省が求められる。 (『ALL about SWINE』第17号より転載)

協会々員数

平成12年7月末現在の会員数は次のとおり。

正会員	152名
特別会員	1名
賛助会員	4名

SPF養豚の現況

1. 認定農場数および飼養母豚数

日本SPF豚協会が平成12年6月末までに認定した農場数は150(表1)で、平成11年3月末に比べて7農場減

少(▲4.66%)したが、飼養母豚数は54,330頭で前年比1.1%の微増となった。農場規模で見ると、認定農場の平均飼養母豚数は328頭で、全国平均85頭に比べて圧倒的に多く、SPF養豚が大型農場に多くとりいれられていることを示している。

認定農場が7農場減少した理由は、1農場が萎縮性鼻炎の浸潤により、他は経営形態の変更によるものであった。

一方、非認定農場を含め、SPF種豚のみを導入している農場数は約490で、大きな変化はみられなかった。

表1 日本SPF豚協会認定農場数および飼養母豚数の推移

年度 地域	1995年度		1996年度		1997年度		1998年度		1999年度	
	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数
北海道	3	532	6	952	8	810	9	1,926	10	2,100
東北	26	12,538	21	11,579	23	12,901	24	15,065	28	17,940
関東	37	8,716	39	8,232	54	12,645	69	14,636	56	13,417
甲信越	15	2,038	13	2,494	6	1,151	8	1,775	8	1,780
中部	1	308	2	674	3	1,261	4	1,750	4	1,750
中四国	11	2,511	15	3,542	17	4,652	17	4,338	19	4,793
九州	16	12,330	19	13,517	22	14,568	26	14,314	25	12,550
合計	109	38,973	115	40,990	133	47,988	157	53,804	150	54,330

2. CM認定農場の生産成績

1) 一貫生産農場

SPF豚協会認定農場の生産成績は表2に示した。この中で最高、最低の数値は集計に用いた全農場のデータから各項目別のそれを求めたもので、ひとつの農場の成績を示すものではない。したがって、SPF豚農場の成績を評価する場合、平均値、もしくは上位(農場)25%の

平均値を参考にすべきである。

2) 肥育用素豚生産農場および肥育専門農場

肥育用素豚生産農場および肥育専門農場の成績は、対象農場数が少ないので参考のために表3および表4に示した。

3) 肉豚1頭当たりの薬品費使用の内訳

SPF豚認定農場のうち一貫生産農場農場で使用され

表2 CM認定農場の生産成績のまとめ(一貫経営)

1999年次成績

	母豚頭数	離乳頭数	飼養要求率	事故率(%)	母豚更新率(%)	農場数
件数						127
最高	2,149	26.80	2.84	0.40	100.00	
最低	24	19.40	3.56	6.80	6.60	
平均値	327	22.46	3.23	2.76	26.80	
標準偏差	341	1.52	0.14	1.23	10.50	
上位25%の平均	804	24.61	3.06	1.54	17.20	
基準値		21.00	3.30	2.00	30.00	

表3 CM認定農場の生産成績のまとめ(肥育用素豚生産専門農場)

1999年次成績

	母豚頭数	離乳頭数	事故率(%)	母豚更新率(%)	薬品費	農場数
件数						2
最高	1,361	24.30	1.20	37.0	¥388.00	
最低	926	23.00	1.90	32.7	¥277.00	
平均値	1,143	23.65	1.55	34.8	¥332.50	
標準偏差	217	0.65	0.35	2.1	¥55.50	

表4 CM認定農場の生産成績のまとめ(肉豚肥育専門農場) 1999年次成績

	飼料要求率(%)	事故率(%)	薬品費	農場数
件数				1
最高	3.52	4.00	¥147.00	
最低	3.52	4.00	¥147.00	
平均値	3.52	4.00	¥147.00	
標準偏差	0.00	0.00	¥0.00	

表5 肉豚1頭当たり薬品費使用の内訳 1999年次成績

薬品費/肉豚	農場数	平均金額(円)
100円未満	19	62.00
100円~199円	29	156.00
200円~299円	27	252.00
300円~399円	27	338.00
400円~499円	12	437.00
500円~599円	10	561.00
平均	124	262.00
最高		589.00
最低		13.00
上位25%の平均		88.01

た薬品(ワクチン費、栄養剤を除く)について、出荷肉豚1頭当たりの消費金額を表5に示した。ちなみに、日本SPF豚協会は使用する薬品費の上限を出荷肉豚1頭当たり600円と定めている。

生産ピラミッドの変更

住商飼料畜産(株)の解散決定にともない、住畜生産ピラミッドは清水港飼料(株)と住友商事(株)の合弁によって設立

された(平成12年8月1日)、(株)サンエスブリーディングに引き継がれることになった。

ニセSPF豚肉表示をなくすために

各地で自称(ニセ)「SPF豚肉」の表示が横行していることに対し、会員から様々な苦情が寄せられています。しかしこれに対し、当協会が何らかの抗議行動を起こすには法的根拠がありません。そこで我々は、自分たちが供給している豚肉はSPF豚協会認定農場で生産されたものであることを、消費者に正しく認識してもらうことが極めて重要になります。この主旨にもとづいて当協会は3種類のシールをすでに制定しております。これを活用することによって自称(ニセ)SPF豚肉を排除していく努力が必要です。詳しくは各生産ピラミッドの担当者または協会事務局へお問い合わせ下さい。

協会認定シール



トレイパック用



枝肉用



段ボール用



新たなスタート・サンエスブリーディング

(株)サンエスブリーディング
代表取締役 **秦 政弘**

最近連日のように市販食品への異物混入の問題がニュースになっております。

ハエ、ゴキブリ、ヤモリ等あたかも昆虫図鑑でも作れるほど多種に渡っています。食品衛生の重要性を痛感すると共に、SPF状態の維持の重要性も感じ、わずかな可能性の疾病汚染要因であっても可能な限り排除するよう気を引き締めております。

設立の経緯

株式会社サンエスブリーディングは、平成12年8月1日に発足したSPF種豚を生産供給する会社です。

住商飼料畜産(株)の種豚生産部門を引き継ぎ、清水港飼料(株)と住友商事(株)の共同出資による会社としてスタート致いたしました。設立から日が浅く、某大企業の前社長のように「私だって寝てないんだ」と叫びたい日々です。

社名のサンエスとは、清水港(Shimizukou)飼料のS、住友(Sumitomo)商事のS、SPFのSと、3つのSに由来しています。なかなか新会社の体制がはつきりせず、住商飼料畜産時代からのお客様には特にご心配をおかけしましたが、以下の体制で臨みます。

本社 千葉県船橋市栄町2-4-9
大渡農場(GGP農場) 栃木県今市市大渡船場
GP農場(丸森農場) 宮城県伊具郡丸森町字峠上2-1
衛生検査センター 栃木県今市市土沢710-4

営業活動範囲につきましては、住商飼料畜産時代の九州農場を所有しませんので、東北、関東、中部地区を主として営業活動を行ってまいります。

サンエスSPF種豚の目指すもの

小社の目指すものは、「生産者と一体となって、安全・安心・おいしい豚肉を生産し消費者に喜んでいただ



丸森農場 (GGP農場、宮城県丸森町)

く”ことです。そのためには、小社の前身である住商飼料畜産のSPF豚肉がテーブルミートとして肉質の点で淡く、光沢があり、きめは細かく、しまり、保水性、食味性などに優れており東京食肉市場、横浜食肉市場など各市場および顧客に高い評価を得ておりました。これらの高い評価に対しましては継続させていただきます。

また、今まで以上の生産性の高い、高品質のSPF豚肉を生産するための種豚(高いSPF状態、抗病性に優れ足腰の強い高連産性、優れた枝肉・肉質形質、高い繁殖性など)を揃え安定供給するために、生産者と密着した「サンエス情報・認定制度」システムを確立し、多くの遺伝的(育種価など)および環境要因の情報を生産現場、生産物から得るようにします。

さらに、改良効果をより確かなものにするための飼育方法なども含め生産者と密着した育種改良、業務の推進を実施する所存です。

なお、種豚の供給体制に対しましてもお客様に今まで以上、安心して頂くために新たなGP農場の建設も計画しております。サンエスのSが、Superior(すぐれたの意)、SPF、Swine の3Sであると言われるように、全社員一丸となって粉骨砕身努力してまいりますので、今後ともよろしくご依頼申し上げます。

会員
プロフィール
紹介

山中畜産 (北海道長沼町)



山中茂樹さんと
奥さんの寿子さん

(有)山中畜産は北海道夕張郡長沼町で水田14ヘクタール、麦4ヘクタール、飼料作物3ヘクタールを持ち、母豚330頭規模で経営しています。

社長である山中茂樹氏(46歳)は、昭和51年、22歳の時に父武男氏から経営を受け継ぎました。当初は稲作・養豚の他にも和牛、アンガス、ヘレフォードも放牧する複合経営でしたが、肉牛の大暴落などもあり、53年からは稲作と養豚のみに経営を転換しました。しかし、転換後も豚の疾病による生育悪化、養豚部門の拡大に着手している矢先に、大洪水に見舞われ豚舎と豚が水没するなど大変な苦労をされました。

そのような折、近隣にSPF豚農場が新設されることを知った社長は、北海道内の農場に加えて、東北地方の先進SPF豚農場まで視察に赴きました。その中で、SPF豚の素晴らしい生育ぶりに驚き、SPF豚が「これからの養豚になる」と考え一大決心をすることになります。

以後、平成3年度に新農場に着工し、翌年に母豚380



地元スーパーの精肉売場に設けられた「山中クリーンポーク」コーナー。山中さん夫婦の写真付看板も、協会認定シールもしっかり目立つ。

頭を導入、平成5年の末から本格出荷を開始しましたが、目を見張るばかりの生育ぶりだったということです。

こうして山中畜産から出荷された肉豚は、すべてホクレン農業協同組合連合会を通じて、北海道の大手地場スーパー「北雄ラッキー」の主要19店舗に卸され、「山中クリーンポーク」として精肉コーナーの主力商品となっています。この「山中クリーンポーク」はお客様からも「歯切れが良く、柔らかくて豚特有の臭みが少ない」と好評を得ており、今ではSPF豚も北海道ですっかり定着しています。このように、北海道でSPF豚の地位を確立できたのは、山中社長の積極的なPR活動と地道な努力があったためと言っても過言ではないでしょう。

農場としても経営は順調で、社長自身数々の要職を抱えていることから、現場作業は信頼のおける場長以下従業員に任せています。また、後継者として二人の息子さんもいらっしゃり、まさに前途洋々と言えるでしょう。(ホクレン農業協同組合連合会飼料部・高谷 和宏)

● 投稿歓迎 ●

この会報をより充実させ、会員相互の交流や、連帯を強化するため、会員の皆様の積極的な投稿を歓迎します。地方の話題、主義・主張、技術情報、協会への苦情・提案、自分の農場の宣伝、エッセイ、短歌、俳句、狂句、川柳等々、何でも結構です。送付先など詳細は事務局 (TEL.03-5283-5021) までお問い合わせ下さい。お待ちしております。

編集後記 最近、SPF豚肉が安全、健康な豚肉として評価され、普及してきています。これに伴い、協会の認定制度できちんとコントロールされていない「ニセSPF」が横行するようになり、真のSPF豚肉の評価にも影響しかねない状況です。消費者にとって協会の認定シールは「ホンモノのSPF」を見分ける重要な手段なのですが、普及が遅れているのも事実です。このような中、真のSPF豚の啓蒙、普及のため本誌が発刊されたことは意義深いものがあります。会員の生産者の方々はもちろん、SPF豚肉を取り扱う流通関係者、さらには消費者の方々のための誌面としていきたいと思えます。創刊号の編集にあたり、伊藤さん、石川さんはじめ理事の皆さんには多大なご協力をいただきありがとうございました。(哲)

日本SPF豚協会だより

創刊号 2000年10月1日発行(季刊)
発行 日本SPF豚協会
〒101-0047 東京都千代田区内神田1-2-6
TEL.03-5283-5021 FAX.03-5283-5022
発行人 赤池 洋二
編集人 林 哲